

## 解説に代えて

熊本保健科学大学副学長 岡部由紀子

「熊本保健科学大学ブックレット」は、創立50周年記念事業の一つとして、2009年から刊行されてきました。たいていはその前年度の本学の行事のなかからテーマを見つけて、企画編集されています。大学はどこでも、研究業績にせよ事業報告にせよ、たくさんの公開資料を発信しているわけですが、このブックレットは、そのような、いわゆる公式の大学運営とは別の切り口から編まれてきました。まだ3冊目ですが、「ネコ」「さくら」「太陽」と展開して、カテゴリのスケールが寛やかでのびのびとしていること、にもかかわらず、内容にどことなく医療系の本学らしさが漂っているのを特徴だと思っています。責任編集者である小野友道学長の、テーマを見分ける直感力と原稿確保の力量に負うところ大です。

ブックレットの最初の2冊は、ほぼ同じテーマを掲げて本学で開催されたそれぞれのシンポジウムをもとに構成されてきました。3冊目となる本号は、本学の関与した二つの特別講演を背景に、新たに書き下ろしていただいた原稿からなっております。

2010年の初夏、2月末に完成したソーラーシステムのお披露目となる、太陽光発電設置竣工式が行われました。当時は本学で最も収容力のあったL1教室を学生で埋め尽くし（立ち見の教員も多かったと記憶します）、しかい斯界の専門家である谷口功熊本大学学長が、記念講演をしてく

いただきました。「学長になつてから、学生に講義する機会がなくなつて、久しぶりでうれしい」と仰おっしゃつてくださったのを記憶しています。その後の超こ多忙な職務のなかで、「クリーンエネルギーとその将来―太陽光発電を中心に」という、アップデートの新たな原稿を寄せていただきました。

その年の秋には、日本私立大学協会九州支部の総会が熊本で開催され、本学は当番大学としてお手伝いさせていただきました。その折の特別講演をシャープの執行役員ソーラーシステム開発部長の村松哲郎博士が担当されました。参加35大学約70人の理事長、学長は、それぞれに大学運営の重責とともに将来展望を厳しく見据える立場にある方々ですが、平易でいて専門性の高い壮大なスケールのご講演を伺つたあと、どなたの顔も明るくほころんでいたのが印象的でした。わが編集長が直ちに原稿をお願いし、まもなく「太陽の恵み」と題した原稿を頂戴いたしました。その後、我が国が東日本大震災を経験するとは、思つてもいないことでしたが、科学者を含む人類すべてに課せられている現代的な問題として「エネルギー」があることを、あらためて噛かみしめながら、二つのご講演を思い出しています。

今回のテーマ「お天道さま」は、そもそも本学自慢の「ソーラー畑」に端を発しています。その背景のコンセプトと自負を、大嶋安博環境施設管理課長に書いてもらっています。大学には、校舎をはじめ、たくさんの、規模も用途も仕様も異なる膨大な種類の施設や備品がありますが、電力というインフラにかかわる目配りは、教員にはなかなか及ばないところでしょう。巨大なフライパンフライパンをめぐる小野学長の「思いつき」を、じっくり検討し、熊本保健科学大学の理念に

照らしながら、その意義を計量し、理事会の理解を得ることも含めて現実性をもつ企画にしたのは、事務部門の見識でした。いまでは、親子見学会まで担当してもらっています。このレポートは、教員とはひと味違った角度から大学の未来を思い描く事務部門の一面も伝えてくれています。そして、「太陽」と医療の関係を正面から扱っていただいたのが、熊本大学大学院生命科学研究部運動骨格病態学分野の水田博志教授による「太陽光と骨粗鬆症」、および本ブックレット編集長でもある本学小野友道学長の「太陽は皮膚の敵」という2編です。お二人の医学者による、かみ砕かれてやさしい表現のうちに、素人の私でも、太陽のありがたさと恐ろしさを感じ取ります。添えられた数葉の写真も、生物である私たちをあらためて自覚させる資料です。

最後に、軽い拙文を載せていただきました。「太陽は神様か」という、驚くべき題は、編集長から命じられたものです。最初のうちは、「何という無茶な題だ！」と思っていました。原稿がそろってみると、不思議にも、読者のクールダウンをもくろんだかのように、それなりに納まりよく感じられる気が致します。

それぞれにお忙しいなか、原稿をお届けくださいました皆さまに感謝すると共に、辣腕編集長とそれを支える企画課の皆さんに敬意を表します。